道明寺
七騎落
雨月
綾鼓
常陸帯

十五

道明寺

第

善光寺そうとういゝやく仏心寺

ある僧也　扨も我相摂国日本紀ニ

所よみて尊やうか申者ニ我善光

寺如来ニ一七日こもり申て候へハあら

たな御霊夢を蒙て仏羽よ是より

河内国土師寺なるへしあらありやと思ひ捨て

ちやうかりける世中をいくまるゝれ
そひ河猿衣明日の山路よりこく
猶行方ハ白雲乃海もみえたる西雲
うる夕日かゝれの霧間より流れもこ
まや河内おちこち乃里をさた
名もしく長月の今を指の秋を
えてこそ紅葉乃おちこち里まで

それ残る音こそや松風よりぞ来る
頭を見まよ出たる冬へいば此里の名を
ちは寺の仏縁に住申春也有難やな
まは指ともきれるものさく指もけ
きる北天満神乃宮あたおりをでもさ
梅が枝値遇のうなしもを志ま乃心まさいかれ
らかいまうへ頼もしやいさや寺そとき

こゝろよく 神ありつる松は千かへりの子
代乃秋つく霜をかさねて下草の
此の方ははる〳〵都より神は住むそ
末の宮路久しき瑞籬かはらぬ誓
ひかり有かたや いにしへ宮人の
申つたへし事共 此方乃おもむきの
行てみへ候へ 是ハ善言なる乃

筆乃御夢想によりてかくある
かしこまりて候 寺中の人々にあひ申 御夢想
乃趣をかたらはやと存候 是非成て
を申ゆへ御夢想乃やうをこれ
老人より御語候へ 寺中の
人々もさためてやかて何とやらん
何方ハ委く上て 寺中の人々に御

ひろめ給ふ賢傳上人是は相摸國
田代と申所よりむまれさせ申せしに
てんかの我人念仏往生の志ありふかうして
かゝる信濃国善光寺へまいり一七日より
籠し給ふに如来御前にて念仏を申
きかせん夜よりの夢に霊夢をかうむる
老僧のあらたなる御声にて汝念
仏往生の心ざし誠に懇なり志あらば
五畿内河内國志紀郡土師寺天満天神の社
有けるが彼所には神明をあがめ奉り七社
の神をも勧請ありけり又天神は
一切衆生現当二世の為五部の大乗
経を書供養して埋まれけるに軸
より木槵樹の木生出たりけるこれに

さとり殊殊しく念佛百万反申されは
往生疑あるまじきと思ひし處に先
ねがはしき事ばかりなる御身を起させて かく
おかかる疑ひなき往生の證とも申
ものへとてこそ申けれ 先唯今の
まはる木穗樹とも申ならぬ世の方へ
御出へ さりながら御法申けれ

是に神明をたゝしめ給ふ七社の神を
さとらせ給ひされば此時は天神にて
此君があまたに成て居社の御事の
かくりの本穗樹のごとく作に雄を給ふ
然へ 右疑や神も仏も同一体といへども
さらに天神の意の御結縁今もちらめ
て取りは 大そて此重乃御や告今

かたじけなくも天神乃御ほんぢ一躰の御値
遇天神と申に其御本地救世観音
みくまの海さ給や ふかく是ハ
理りなるかな昔在霊山名法華今在
西方名弥陀の 娑婆示現観世音
三世利益同一躰 これ外神やなど
けさは 此皆水波乃隔みえず弘

一如まさに此のみちあきらかなる雲
路ね神の宮なるぞたのもしさよ
有がたし室神力も仏教を知
光のちかひに家く結ぶむそためとこの道
きれく 支仏の教へ神乃道
五濁の時代を経る迄神を潤世を無
給ふ 皆く西都ようつり給ふ 二月

下地五日ゆくや都を出させ給ひつゝ
志賀の里に猿宿あるとや松の御神
あひとさかえ代々値遇の御結縁に
たゆるまし角くそこらのあゆむ道
のへの末葉の露もしほるゝは君が
まし宿の栖をゆくをかたらむとふ
かゝりそめるゝよの野に禄めかりそめとも

あそからすあめのさい梅をしるしにほひける
あせ給ひぬ猿乃宮居にかよ心つらし
さらに天降鄙の国みまを渡りせ給ひし
うゐあかりて都対楼乃かゝる観音寺
乃鐘のひゞきけさくはや告くは都乃
春秋をいくたひとせの時いまの人
をとかはらて三四月落る滝八百千河

萬乃諸尊乃よりどころ 破蒼を
照らさせ給ふ法乃主りあや 白ハ北
開かせたまふかる士たりぞ 西都は
恥て清らかなる尸と押ヘ 神蔵あるは
菩薩はうれし乃那して 此願はあまねしや
天満陽蔵をめでていられる 宮右
雅やまことばもなく 清成仏乃さの三

七

生まれつきなる 若き日 枯るる木に
にほ桜の花がさかりそのまゝてやめ
むぎん木穂樹花さく宝ある影をよ
宮や花咲なる あまねく樹乃ほどこしつくら
たのむ 法をさとりなる あまねくいりて
田の月の いつしか 有乃樹なれ
莫ろ乃珠数乃御法を持ちつき

八

申かけてぞつねとなる末は立留りて
我か天神は山姫とい詞とり奉る
大夫乃神と申翁草は白雲乃末て
きりや霜くもりにちよふり久雲
乃あかしちよの神楽百と思ふもれ
そうろや倭舞楽乃やくそくふりかを
申しく琵琶琴和琴笛は在る

宮ゆきもほまされ候ふなや遊にそ
まつる大夫のひとゝめの御神楽月毛
うやく宮寺の常乃うまを火めつるり
みすゝ白大夫乃神七社乃御前に韓神
催馬楽にや駒拍子はやくといふ
家やまつ大夫 作るあやくをる
院よりかふに白大夫乃舞を霜つかる老ら

みれやくもゐにゆらきけつ　いやよ
ち仮宮のたからの宮にてたかき賢き
なり　神の御辞も叶ふまつ　御その
やくはうかんむりかけて　庭火のす
けや　あきら玉垣　うちやゝなるその
中にこく白妙の小忌の袖かへるや
笏拍子うちよりつゝ声をそろへて

乃笏もおもしろうおもしろごへの笏拍子
おもしろや秦王が破陣楽
の曲くは七徳あらはす七拍子膝付
屋してひとつやまひさすらひあまねく
慶縁をうけさせたまへる手には壽福を
まねき千秋楽は民をなでやしなひ万歳
楽には命をのぶる法の延びるきみ人

乃梢を旅の宿りさば菩提樹のこ
まちゑよかりてふるや一味の雨風を
そゝぎて柳より出る乃香やさふ花落して
破るむまやうてある人所これはされ
乃まとめつらめく數ある百八煩悩乃數ハ百
八煩悩を明さる數珠乃首明ける鐘
作りごに神楽乃多いハめぐる里

七騎落

第五元
才ハ捨小舟うらにてもゝく甲斐お
きやうき無盛し　是ハ兵衛佐
頼朝とハ我子也扨も此度石橋山
乃合戦よ味方うちまけ僅よ主從
まん孫よ一夫安房上總乃方へひら
かはやと存じ候ここに土肥の次郎

御前よは　御身に味方を致す者
何かと安房上総の方へひらう
きせ給ひ我身を思ひて舟にのりたまふ
付て　長ては、さくより御かへ
乃りをも申付て候、思ひ立て白き寸
まつり　いに実平　御前よは
唯今我等共に持したる人数いかに

あるそ　さて白い七騎は房　拙者
我が御身の八騎よりかご思ひ出する
其有、祖父為義もちせんへひき付
其上の八騎は父義朝は河へ落ちぬるも
其後八騎はくだんへ不吉の例也、実平
すでに八騎より一人あまして作へ
長ては、実平は船をのせ給ひて立

ありし御法の人数を定させ給ふ
一番よみは田代殿　相二番よみは吉がい
の次郎　まさは三番よみは土佐の三良
四番は土佐房五番よみは宮平が六
番よみは　同じく遠平　七根よみは
よしさねあり　山くは君の
さがく龍門原よみ上る尻をいさう

まどひけるは今しく命の行方をしらせん
らひさるもとがりもめ宮平思ひのほか
赤面したりけり　さうゆへに宮
平行さし居寺にこそ急ぎありけり
良てみづから国清殿よりみこ番
より御おりて行と来より毎よう
ありよとはや　中くはす　[illegible]

ば御法乃中にば某一代老様あるべく候
程よりひく愛御用にも立ますまじ
去とは殿も限りもしてがやうり
頭よおずを候よ世ひらくハ御舟より
打もし候まし　いや〳〵たれ乃
ゆかくハあくゆぐる夜よ忘れて
はほうよ陸の道さによ候　いや

可捨ば身中よ命かなり物さし
まる者も御恥よりありされ侍
思いつき候身をも取りあらバされ
人よ世等おより死まるとば命を夜
ひより抱持て二つ物きらめされ
乃加　比も其菓も助ほとハ命
もまうり物く御をど耳一つ乃いのち

忠々我君よしあさ世とそれは　仰らく
其謂は候　其事にて候ば昨日石
橋山の合戦よかまけ候佐奈
田与一義忠は副将軍としてきこえ
俣野と組て討されしは親子
主一族二つの命あるや見中さいは去
肥後そこ代の母よ親子一所に涙あるべし

ござ孫のく遠平せをおあるをかるべき平
をおしそてのしおかくが親子の内一
人ありられぬ　記さく候給ひ道
理よ物あぬの海ひぞりて遠平君よ
里の御説よそ右日そ急ひく御前
よりありのへ　行と御いろよりあ
里よと行る　中くのて急て

あり候へ書遣し御くれたる君乃御
たのみよたてまつり候御恩のすがたにをき。
御母よりハありがたく候　これらし
き事をと申君ハ忠乃為父乃命に
さハあまりにぞ急く御母よりありがた
候へ　いやしく君の仰にも父乃命をと
ハ有たれバ父母よりハあるまじく候　言

語道断乃事を申ものゝ候君乃仰
為父乃命をも及バざるく候ありかた
きと申候ても父母ハ命よりも重し
しかれて　猶以君乃御恩も天下に
深かる故に字　何殊にも其の深き
しかし可賀にありがたき申者を
ありさまよりぞ其御母よりありやう

是れうし、、ふに申候さらハ基御
母より松之ハ久し　何と申まゝ是
とやかく宮し今社そなりしうかく
ハ久あまして見よ敵大勢打出すれバ
まへく基うふとられ舍てさき去
やうからしよ勝よゞん勝ふうり
あしきれバそ我子をお給し直実

平お母よしまやとくうり　地　ゆくるゆる
さらひら哉とだらひりのを思りやう
親子乃別まし痛りや　和　父乃子られハ
やよ姿守君を始めしまくさく皆々て
よは名残こそ惜し之　波松浦さよ姫う
ぐ、ろつし安志うひ宿らくお
ごさぶらしひまし伏し有様も今書平

かれやとそれがしまて積しくと涓滴
をとそ流る契の礎ますや
舟ぜありともにもしあへまと跡を
見ゆるうたてきあはれなや遠さ
この浦の浪立列げくあらき海を
乗の人へは心して懐きある
舟人のよすがは何かはいさましき

さてこそかしとて伊く海の三途
も称に心すゝくを行ぬよ敵大将
見ゆるたりとそや遠き平家にかゝる
さらば頼朝もあられ三陸をとり給
思ひさいまうきに恩愛の契りを
かくなるを限りとと思ひ定めしに
朧忘ひすびんへ来まさんと心のまゝ誘ふ

さあられ幸平家と一門は討死して
きやとかられて我ら二人を思
舟乃別れて気色ありきなく泪
張月乃西乃空行雲宮めの海路
うれ沖なる波の音とも附む
しなうとおうろや　あまりみて
たるも仏舟まで有まにはゞ見えて舟を

漕出く　長ては　いかにめのとのあまりに
兵船一艘見えてんぞこなるようで
望をかけうちよせくる　殺さう
作ハ　いかにあれなる舟ハ見へたるなき
た家御舟なるそ　我もそれ
乃船のけしきあやしく見えるやひたふ
あらざるも泪人乃舟や乞　見乞吉

土肥の次郎実ひらが妻たる母
ゆゑ何と土肥殿の御母とはいや
中くの子ぢ梅は母は子の外たる
御母なりしぞ　是は和田男の小太
郎義盛が妻なり船よ梅は和田
殿の御母なり中くの御内に
通をしむく御味方よしまし

為よ是迄参りてん梅君へも御
身にんほうつ　和田殿も今もたる
子細候間唯今しまりては去あつ
ぞんたなりゆ心にみはるかく
ばいかに和田殿へ申は是迄の御参り
目出度さりあつて面目もあるさゝ
乃ん所はのぎほどよりも我君をも

次
扨も只今の訴ヤル

兄弟の中がかれこれかわれ兵と成
てこそはありつれ (甲) 何と君には御
身に御座あるや (シテ) 御成候
(甲) 言語道断の事かな 抑我味方
をば思ひいでゝ日頃も頼もしく頼朝
には都中に上り候命有らばさて何かと
いでゝ自宮に居を腰の刀に手

さあらば有り趣旨は此身に御座候
(甲) 何と君にはさて身に御座候や
(シテ) 中々の事 (甲) 法師そのかれにおゐて
そ (シテ) 思ひ出し戯事にて候妻
陸奥はやまほどにさ身せもよかれ
又御身せもよく候へば陸奥へ
御對面申すこと (甲) 四ヶ所候

はや〳〵陸へあがらせられ候へ
シテ いかに申候 御前に候 ワキ 我君
七騎なりしが只今ハ安堵仕りて候
シテ 実〳〵尤にて候 ワキ いかに土肥殿に
申候 シテ 何事にて候哉 ワキ 此御供
の中に何とて御子息遠平を入ハ
よりなぞ シテ さればこそ申謂有

を陸に残し置て候 ワキ さくより
めでたき座舟につきしとも御前集
よ思召候くさせられ候ほどに殊に只今
迄ハめでたくめでたくぞんじて土肥殿よ
し思召けるにちと隠し置ける舟底
よりぞ遠平をひきたてゝ見せきれて
シテカヽル
ワキ さて時実はあまりの事
上ハル
実に現の

こゝろよそにて見えしいきつる泣
おすゝめたもへは仙家よ入し方の岩
ほまよ立かへりし七世の孫よあらず
のかまへそしつゐまされけり
うに義盛よりは梶原者をば何とし
て召連られて候ぞ　さればこそ
景伴ひよたる渭て御前をさし申

よきしたるか　思へは物語候へ
梶も昨日石橋山の合戦破れし
かいおもはざる将君をうちもらし
大将法よ打出させしよ菓も一所
よもれしか出しか行をもみれば
たる若武者一騎ひかへたり其駒をき
よせてかれたる郎子息喜逃手あり

急き馬より落てありげまく御祢
まミて討舟座よりのきり見く立候
ひくまりふりどなんほう去肥所よ義
盛ハ忠の者なれバこそ　明日右経
きミの社んに移さん御物語も半
ゆく落涙仕りてかへとかへくとかね
是の泪とや思しましまするらん

あまのあまかハく何かつまむ唐
衣川もぬれよなみきへ月の盛
さりとも隠の明月の　心うき
しかも酒宴の砌　いつに宮平経子同宴
御おあれてびときし御舞人　に袖
はそと舞もとろかく　心うきし花
酒宴小引て附日すゝく雅きん

ぐ國々の名をもせし氣まれハ得とお
く御勢二十萬騎を給ひ候
ぞまれほゞ治め給ふ人あまたの君の代
のめでたさをもきゝもさぞ手さし
忠勤の道よりぞ起りたる
あさき忠とハ思ふよりも矣
乃家こそ久しかりけれ

雨月

心をさそふ雲水の〱行方やいづく
成らん　是ハ嵯峨の奥に住居する
西行法師なり我宿願の子細あるに
よつて住吉の明神に参籠仕り候
住なれし嵯峨野の奥を立出て〱
西より西の秋の月もとゆく影の

志るべかへて難波乃津の浦づたひぬ
まさ礼儀もたらちやら住乃江に着にけり
〳〵急候程に是ハはや住よし
に着て候我社前に参り家かりてこそ
さもらひありき候程にはや日乃暮き
て候よしやあれを見れバ釣殿乃見え
こそ候へ火の見え候を尋て候

ほどに立寄宿をからばやと思ひ候

シテ上
風枯木を吹けば晴天乃雨月平沙を
照せバ夏乃夜乃霜かれたる秋
乃空頼りに堪ぬ半の月ぞ荒面白の
折からやな

ワキ
いかに此屋乃主へ案内
申候

シテ
誰にて渡り候ぞ　行脚

ワキ
たる修行者にて候一夜乃宿を御借

シテ
侘人〽すみなれし竹の庵
みつ袖よお宿ハ叶ひましく今ほとこ
志さゝハ〽色り作〽あまく是ハ
世捨人の痛ましきれハつきぬなく
二人
去なから杖なをあかれハ帰れとの
月をも思ひ雨をもまつ心にかき夜
あるともめかれ行端の木の風殿いへよ

よ里てさゝまり給ふへき　ワキ　扨ハ雨月の
かきりをあらそふ心ぬへつけ月ハいつき
そ雨ハいうた　ワキ〽うもハ元夜月うめ
てゝ核関もしとゝと行もてかつん
シテ
〽祖父ハ秋乃むつ時雨ず乃ばぶ透
あつゝ音信とて行端かく　ワキ〽如
てハ月影　シテ〽おちる村雨　ワキ〽実めおさ

我れ住居ゑも　シテ上 賤が軒端をふき

ぞわづらふ賤がのきばを葺ぞわづ

らふと面白や則歌の下の句なり此上

の句をつぎ給ひて御宿の事を申

候へ　ワキ詞 げにや我も歌の心を知り

をあらはし出る月は漏る雨はたまれと

とにかくに　シテ下 賤が軒端を葺ぞわづらふ

シテ ワキ 上二人 月は漏れ雨はたまれととにかくに賤が軒

端を葺ぞわづらふ　シテ中 面白の言の

葉や只此理りを知ればこそ夜の月をも

思ひ雨をもいとひしもなのに

へつき給ふや　上ヲ 折しも秋のかはし

三五夜中の新月の　二千里外故人の心

も心あるかな秋の空時雨は又瀟湘の夜

軒のあれて思ひつゝく　あら一村さめの
時こそ作れ　定村雨の聞ゆるぞやどるを
里小篠の嵐やらん　然ときけハ時
雨ならで定めなき秋の影の　行嵐
の松よ　吹なるぞや　一雨かゝる
あらきれバ袂のあらし吹落らく
中く里ハまさらよの前ぞすゝわれ

月もさえ入らでもきけとつく閨の荊
嵐の松の風越ハもとみの岸打浪
をもほとゝぎす　假寝の夢をもめづらしき
むかしをそそて袖振抱さるも袖ハよ
をもあひにさく　堪ぶよ伴さく
堪ぶよ今世のかきを賤の女が
闇もしらぬ　哀ちぎりの為ハさぞ

あらて秋乃うらみれからよ夜月見んう
てらにうつよ時雨きぬ夜すし時
霜さえ槙木の葉乃雨のふる音は仕まの
激をしいとかさき心をそめて染くの
木葉染衣の袂のよ露をもや寺
月をきて重ねてたつる袖の染つ
然しみましまれ散りぬる木

の葉をうち集め雨のふる聲と思ふらむ
まや夜もしをすがり捨人を御休ませ之
家は荒たる所から一夜を津守乃小射
あれは秋も老の寝覚乃筆かりかの夜
よかなる古への秋をはねぬ枕して旅寝い
けやまとろまんあしたより見れ
独吟やるは陰陽二川雲道ありまする

ぞ乃句をわすれて又我さへ忘れ去
金水あり上下は則天地人の三才なる
是詠吟なるべし我ては誰かその
思ひがけずめぐる西乃海あらき
うきつの波間よりあらはれ出し
まつらんよしの神詫まさにてうつ
さするしも此神の同位をもつは

およそ此神は衛門の院にて高貴
徳王菩薩と号し奉り玉垣の
ち乃國に跡をたれ和歌を守りて
あみのことばや松枝乃をとにもさそへ
せて風像をうつす家に和哥の人稀
なれ歌に西行法師歩をもたらし
まひろをも求むる和哥の友なく神

明神受させ給ふと見えけれハ神主
のほとをしめして宣旨の頭にかけり
けける謹上再拝ありかたかりし乃
影向やげに信をもとみよしの嵐う
けるそし松風を調ふれ鈴乃声でい
ことふの波のよと舞手の振舞衣
袂をしけふそ心ぞ舞よあらはる

その風ひさしかりけり足とあかりや
今かうまうやまうのかくらを神宅をつけて
やらとゆつてれ神楽あるも仕れ
きれぎとの官人とありて本宅よ
帰りまありやそとれかりていつりき安

綾鼓

是ハ筑前國木乃丸の皇居に仕へ奉
る臣下にて候さても此所に桂乃池と
て名池の候に常ハ御遊乃候ふ爰に
御庭をはく老人の候が女御乃御
姿を見まいらせ賤心ある恋となりて
ぜ力をつくしなきれ恋にハ上下をきらね

習ひおきしへバ不便よ思召給ひけれバ彼池の邊
里乃桂木といふ枝よ鞍を掛意乃きく人よ
うちきられ彼鞍の声皇居よ聞えハ其
時女御乃は姉海人へ給りしとの御刀
そくの猩よ彼きく人を召くや聞召ちる
となりいふ頭なるいつも是御庭
ちきの乃きく人よ気ひてし手まことやらへ

いろはきく人バ海士意乃刀を舌をも聞召は
ちかれバ不便よ思召あすバ桂乃池是桂木
乃枝よ懸ありれける鞍を叁人しまりて
うちら人へ彼鞍乃声皇居よ聞へハ今立衣
女御乃は姉を海士る之さ境のありしとの
はりしじ気しまりて鞍をはりらへ 何長
てかくけられしまりて其鞍をとりしまり

琥はへし　中く雲車はら八波鞁を
頻ニことをうちなく　あるそ六方の
里は八声の鞁のかちく有そて急て待之
宮や所りかぬ月宮雲月乃ろこ
そゞ名ま八てる桂木おきびきハたしく
池邊雲枝よつゝお鞁の声出かゝき
こそ意乃ほうる○とおまてとぞ詠の

鐘乃声遠て又打そめる日おうこれかは
後夜寄寄そとあめおくばく附の鞁ど
うちみよ　申かきる宮ふ閑乃夜露の
さみ乃すま　思ひそそみおぞうおさよ
時のうつりを白波乃　鞁八おとろおお
ちささらん　後乃世あちうつくおのは
さはおとほりてぞきまえへる意ニ

の秋が露も涙もそぼつらん袂か
花の雲井の袖に色そへて何を
しのぶのみだれ心 シテ 尋ねんとせ
心こそ是ぞ寝ぬよりは思ひなれ 様
よ世中は人間万事さいをうがむま
まやあきまに行日数うつるなるらし
けり時は移れどもはてぬよ路へ会ふ為

是の恋命の限りをいはば猶まさる
あさきかやあとはかきは是とた
ちりはさのままよからん シテ上 雲路を
とて暮のめのがね鳴りをさまの
時守の打つや鼓の数しきく声あり
たくはありし人の面影なりやこれ
綾の鼓といふしらくさの衣手

ちりぢりてとも行へぬ身を
老耳乃故ゆらんときけたく池
の波まとの雨しつきもらいと波を
引らき言せね池は汀の桂のあや也
上地
苦鼓やいりとて拍は出ねそ
思日もうちやまずあと綾のつゝみの
音も拍も出ねとも人や待らん

シテ上ハ
出もきぬ雨夜乃月を待かねる心の闇
をさなるへき時鼓もならぬて
地下
何の鼓のうつる日乃きまよみそえた
シテ
色のめし人は憂よさへ月へぬ思ひよ
鳴る老乃身つゝもあらし人をうらみ人を。
下ハ
あはれ何とある神も思ふ中をはさけ
ぬとて少し地をもとさされんかうちと

まことならぬと身をうらみ人をかこち
かかる身にて何の為生きんぞ
池のみぎはに身をなげて失せにけり浮身
をなげて失せにけり何と波を
人鼓のならぬ由をおもひ桂の池へ
身をなげけるとしろしめさんはいかに
されば恋のおもひ人鼓のならぬもことわり

桂の池に身をなげし由申して候
加様の恋慕執心もなによりおそろしう
是へ卒度は出ありては遁せらる
なう人々きこしめされ候へあの浪のうつ音
が鼓の声に似たるはいかに恋面白の鼓
の声や恋面白や不思議やな女御の
法汝ずるもの狂はしくなりたまひけるか

みてあるゆへん　うけくあさき社猩りあ
き綾乃鼓はなるものかならぬをうてと
いひしかはわかうきあさきもめあれと
夕波さわぐ池のおもてよ　あておそる
声ありて池水のかげもさわぐ老
乃波　又立帰る執心恨之　恨之九
歌きれべへは中くあるうある　一会

瞋恚乃じやいんの恨ぞはれましや
心の雲も晴ぬ魔境の鬼と今ぞなる
小山田乃縄しろ水ハたゆるとも心の池
乃いひはなさじとこそ思ひしに
とよみけしは情なくなどならぬ鼓の声
さくよとは心をつくし果よとや心
つくしの木のまの月のゑつゝまうけ

ふる傷の数々あるねうくおもてやんなく
うてやくとせられ数よせ拍子とうくお
傍へくとそぞろとのりあけ責数
つきへぎ数ハあしてうありやくとぎさけひ
ましゅえ女法の法声ぎ意ねちりや物ろや
あひどのをいきあたうてをりぐく乃
呵責をもうくやらんとぞせり骨をく

ふく火車乃責と云ハぎ罪よハまとろし
おそろしや恨何とぞあるへき因果をや
因果きさいせんハまあありきさせんハまの
あるぞしやしり白波乃池の畔のれ植木
よ掛し数の御をやらり所ようりハつきて
ぜうよあくさあけて波のをくつと沈を
しぎの猶をあく死果とあんで女衛

まつうたゝみれて志ありとも以ともおげなく
池の氷のとうくハ風もとけ雨落てぞ留ん
大きんとあれてずの毛をよぞれは
のうへよづまきいよきるあく蛇とあれて
誠よめひとの鬼と云たうゆと思れ自は
の意うち給ふやや恨めやや意うらめや
恨めの女は中もそ恋の淵ほそ入るきる

常陸帯

口伝
加様に以去ハ常陸國鹿嶋の明神に於ひ
ヤ去ありて揚を当社に於ては神事
格之ち為る中あきし正月十一日の祢
手もとに常陸帯の法神主吏と申作
じ日に指ありては訴よじつくきは社中に
かむかきはゞ祢宜事をき執らひ申さいなや

とねがひに参る宮　御前かん　今日
は此神事のことさら執行はるゝ
みな宮人参へ其由おほせ候へ　畏て候
是も出し春の日のどく宮井の祭を
比はむつきの十日頃霞あさうする
日もうらゝ萬山紅也宮の面白や梅桜
きの常春のそてまけないまうに

霜の御まつりする神垣や隔ぬ恵に
かゝる山まで荒ぶるや此神に頼
をかけまくもかしこきや仰ぎ
なすところを敬ふなり　常陸
なる鹿嶋やいにしへよりぞことよの
浪もかゝみより君の御代とぞ岩舟云
出しも遠き代々をもやらく国ゆる姫

今迄も櫻の船よりあがりて汀のき
をたのむ志乃目のぞよ古雨なるあした
うすく時ぞえらくまふの手向の神
まつるむ月のときさ空多乃だむまきも
同じ袖とて貴賤群集そろ数き
或ハ忍れるえなる手向乃きうらよげて
心もとなき花田の帯のまきなすく
契りむすぶの神乃まへに信心をいたして
て急ぎ金前めよへもかなも志をね
思ひ妻あるひハ花の手向なる まつるハ
それよりひろう常の常に一首の歌をかく
かの無紙乃まろく常のまし常陸帯の
結びのひける契りなりけり 神ハいかなる
まし由らし人屋もしもそろう多風られ

たよそあるひとつ常陸の契りやかならず座
かまへて守る神やたゞ頼めのつけ
まくもかしこしや此神の恵みも廣
誓のくもりなきよもすがら露はまもらめ
たゞ恋乃身の命は弘誓世を
頼む志あれ 恩愛やおなじ宮も
しばしそのうちよりかく心も色もゆかしき

ずゐしの常陸の帯とはまきおかけ掛
守るみちおちよもあれてみきは寺もさうさ
たゞたのみ世をもうきまく頼みし常陸
常陸の帯より結ぶ契りあらばまた心も
志れは恋のうちなるものも一手向よさび
ころもただ此神を受け給はさるら
げにくも不審なるぞや 嬉しやな

しこ道ゑづれおうつなる御心乃だいまでは
やゝらくなのこそむすび契りの末ぞ頼
もしや社へ ちかひもちぞその末ぞ頼の
なのもとは心得がたき事成り
人々と今そわるゝ中らん 付もとるゝ絵
殊に枝ともこそり玉章のむすびそ
もしつ乃かげの玉前のなすかゝまくよ

常陸帯にて頼みしよりも男のむすぶ御なえ
常陸帯の我が行きもとせよう
それも契りの末乃ひとつ帯とはおなか
よ見えたる花田の帯に 物くまさしよ
一番に縁をむすぶ人のこと昧昔よりの
神の御告なり むすぶみなるすなはちを
昔お今かまちのよの 神に

末世ハよろしからぬ性信仰の真あらハ
今さへ盛衰ハよもたへし　いざやかまへて
かくて宮居の大前の人目をさらつ
うしろへさかりて立のきたし
あら情なのおやや我を払ふとて
かさても　神ハ契りの常陸帯むすひ
為らきゑうてやすらひの
神前あつう給ふな　宮殿ひハかゝるね
玄鳥相ハこれの鹿嶋の神の御心頼む
あり理る物へ御神慮ひ早くやかし路の
道の果なる常陸帯の　縁とよりても
あひみても影よりそふとなる　立する
うちもへしきむ手向の袖を振るよ
神の床あつめよ　や　ようしとらくもめく

かくよかハ人を秋にむかひ月の袖かわく
あきこよ　宮やしろ月の空まで緑
立そふ青柳の　陰たのむよせひて
貴賤の群集をつどひてや　夜昼を
わかぬ詣では　日も
重ね　歩みをはこぶ　心を
引くもけふぞ　このもかのもに道ハあれど

恋の路ハまよハで　神のちかひをあらハさんとて御神
常陸帯の　結ぶ縁へ　是ハ　かなふなの
神慮とて　宮人持ちて結び神慮
を数ふ人の　かさね置きし
おしをつまハかくその　神慮ハ結び
あるとしと　今[illegible]くとも　象の
うちよかれまし八　思ひよあれハ色

ゝ
ほのよあけそれはちかう海をやあら悲し屋
おそろしや非道を数科よりたく
しやの責をうくるぞやあらかなしの
此事や神は非礼を享け給はぬ上
清しや廉直のかうへに御殿まゐりて
鳴動して此時楽の鼓燈去影
地
和光同塵をかくゆるんと躍き給ふ哉

天地開闢の初めよりいはくらの津國
みちさく雲かゝる八尺の白蛇と現じ
家主の夫婦をも守り陰陽のおもむきを
めぐる契りを結ぶ常陸帯のかごとなれば
事をちる所は今またいふなるや
月
たうとみやこゝろのむすぼれ道座
神のゆうめてむすびよひ給ふやく掛てそ

契りのひたち帯むすひは帯は世乃
あらひびきよめぐるも小車のめぐる
道はかぎりたくらく知せよ
抑恵路よもひらくがくれむすびや
ひむすびや陰陽は二神くだつく
天乃やちまた苔道の岩枕を教鳴の
ならひよりひねもすをおのがまいの姫よ

たぐへあか西南加誌天若神十方國
ちると治めしより神恵路乃源ちのまちや海
ますらへりよみゆとさと神祇あらはよ
はるかなれども乃契りは神うけて
かうきますや常陸帯のかうつあ
なすやひたち帯乃むすよちきりを
ゆるよなるゝ

右之本者觀世左夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也

寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板

皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛